

ポポフ ニュース

14

2007年6月号

No.



ポポフ(POPOF)はポレポレ基金(Pole Pole Foundation)の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立されたNGO(非政府・非営利団体)です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ピエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕する東ローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコ・ツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ピエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、東ローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いに興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと願っています。



活動報告 (2006年5月から2007年5月まで)

- 2006年5月21日 日本モンキーセンター(犬山市)
 - モンキーカレッジ「キングコングとゴリラはどこが違うのか」
講師：山極寿一
- 6月13日～25日 堺町画廊(京都市)
 - ピチブ・ムフンブーカ追悼原画展
- 6月17日 ヤマサキ動物専門学校(東京)
 - JWCS シンポジウム講演
山極寿一「野生のゴリラの真実と誤解」
- 6月18日 堺町画廊(京都市)
 - 「30年前のゴリラたちとピチブさん」報告者：山極寿一

◀京都大学博物館ワークショップ

- 6月25日～7月1日 エンテベ(ウガンダ)
 - 国際霊長類学会
ポポフの活動紹介とポポフグッズのオークション参加
- 8月4日 環境省講演会 環境省(東京)
 - アフリカ熱帯雨林におけるゴリラの保護活動：
霊長類学と人類学の間で 山極寿一
- 8月12日 京大博物館(京都市)
 - グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」
- 8月26日～9月17日 東近江市立八日市図書館(東近江市)
 - 絵本「ゴリラとあかいぼうし」原画展
- 8月30日 東近江市立八日市図書館(東近江市)
 - 講演「ゴリラが絵本を読んだら・・・」山極寿一
- 9月3日 湖東図書館(東近江市)
 - グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」
- 11月11日～12日 名古屋大学・東山動物園(名古屋市)
 - 第10回サガシンポジウム ポポフの紹介とグッズ販売
- 2007年3月22日～27日 草津市立図書館(草津市)
 - 絵本「ゴリラとあかいぼうし」原画展
- 3月24日 草津市立図書館(草津市)
 - グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」
- 4月10日～15日 堺町画廊(京都市)
 - 「石ゴリラとゴリラたち」展

カフジ・ビエガ国立公園の最近の自然保護活動



▲カフジ・ビエガ国立公園内の不法活動
(ダウウィッド・ビシーモフ画)

ドミニク・ピカバ

1996年から2000年まで続いた内戦は、多くの人々の命を奪い、公園内の自然資源を大規模に破壊しました。しかし、最近は公園のパトロールが頻繁に行われるようになり、多くの不法活動が摘発されるようになりました。2005年以来、公園内で年に3000回以上のパトロールを実施していますし、監視員たちは森のなかにキャンプをして不法活動を摘発することができるようになりました。昨年摘発された活動は、アンテロープを捕らえるためのハネワナ、イノシシを捕らえるためのオトシワナ、薪用の木の伐採、建材用の竹の伐採、金やコルタンの採掘、銃による密猟などです。とくにコルタンの採掘は頻繁で、採掘跡は1000例以上も発見されています。コルタンはコロンボ・タンタリウムという特殊な金属で携帯電話やパソコンなどに使われています。高値で取引されるために、厳しく罰せられても採掘に走る若者が跡を絶ちません。この地域は人口密度が高く、1986年に1平方キロメートルあたり248人だった密度が2003年には346人に上昇しています。内戦はこれらの人々の生活を大きく破壊し、物資の流通をマヒさせ、自然資源への依存を一気に高

めたのです。人口が大きいために、自然資源にかかる負荷は甚大です。

この数年間、さまざまな国際機関がカフジ・ビエガ国立公園で自然保護活動を行いました。その主なものは、法制度と政策の見直し、公園の施設や設備の整備、不法活動の抑止です。2006年には、コロンバス動物園のPIC「保護パートナー」が家畜育成プロジェクトを開始し、280あまりの家族にヤギを配りました。小学校の授業料を援助したり、狩猟採集民の家族に農耕具や作物の種子を配る活動も始まっています。

ポポフはこういったプロジェクトと密接な協力関係を結び、環境教育、手工芸品の製作、緑化運動、農業振興などを推進してきました。これまでに公園周辺の21の学校、11の村民センターで環境教育を実施し、今年の初めには6つのクラスをもつ中学校の建設を完成させました。この学校では213人の子どもたちが学んでいます。苗木センターでは毎年10万本の苗木が育成され、公園周辺の村々に配られています。こうしたポポフの試みが功を奏し、自然を尊重しようという意識が人々の間に目だって増えてきました。暮らしも少しずつ豊かになっています。現在心配なのは、野生動物と人や家畜との接触が増えたために、互いに病気に感染するのではないかとということです。最近、ポポフは人々の手に飼われている野生動物たちを引き取り、中央科学研究所に保護する活動を始めました。このなかには23頭のチンパンジーと23頭のサルが含まれています。これらの動物たちの健康を維持し、野生に復帰させるのが今後の難しい課題です。同時に、野生動物と人々との接触を防ぐ努力を重ねていかなければ、病気感染の危険を減らすことはできません。そのためには、人々の意識と暮らし、とくに健康状態を改善することが先決だろうと思っています。



会計報告

「1303さん東海NPO団体等寄付システム」から、寄付金をいただいています。
(株)三洋電気から寄付金と充電式電池をいただいています。

収入		支出	
昨年度よりの繰越金	401,912	ニュースレター印刷費	35,000
講演会・シンポジウムカンパ	102,790	ニュースレター・ホームページ作成費	34,650
展覧会売上	224,095	ポポフグッズ材料費	15,760
作品売上寄付	166,570	絵はがき印刷費	84,400
ポポフグッズ売上(現金)	6,600	郵送費	41,850
ポポフグッズ委託販売	34,480	ポポフへ送金	1,013,340
寄付(現金)	197,575	次年度へ繰越金	530,950
売上・寄付(郵便振替)	621,852		
受取利子	76		
計	1,755,950	計	1,755,950





▶ポポフメンバー

狩猟採集民プロジェクト

ジヨン・カヘークワ

カフジ・ピエガ国立公園は、私たちの国コンゴがベルギーの植民地だった1937年に動物保護区になり、1970年に国立公園に指定されました。その5年後には公園区域が10倍に拡張され、1980年には世界遺産になったわけです。でも国立公園になる前にそこに住んでいた人々は、外で自然資源の恩恵を受けずに暮らさなければならなくなりました。とくに、狩猟採集によって自然に大きく依存していたトゥワ人たちは、それまでの生活を劇的に変えねばならなくなりました。

トゥワ人たちを自然資源の保護と公園経営に組み入れようとして、これまでにさまざまな試みがなされてきました。トゥワ人たちをゴリラのトラッカー（追跡者）として公園が雇いあげるのもその一環でした。作物の種や農耕具を無償で供与し、土地を貸して農耕技術を教える試みも行われました。国際協力により数々の援助や技術支援がなされたのですが、トゥワ人たちによる不法な狩猟採集活動は一向に減りませんでした。

ポポフはこうした事態を憂え、公園内の生物多様性を損なう活動を何とかして減らす努力を続けてきました。そのひとつが、1998年以来実施してきた「狩猟採集民プロジェクト」です。これは、狩猟採集民の女性たちに裁縫を教える活動です。せっかく男たちが公園に雇われて保全活動に従事していても、女たちは相変わらず薪、ハチミツ、キノコなどを採集に森に入っていたからです。彼女たちは森をよく知っていて、都会から銃を持ってやってきたハンターのガイド役を務めることもありました。こうした活動を止めるには、女性たちの意識を変えることが先決と考えたのです。

最初はブユングレ村で、このプロジェクトは

始まりました。8人のトゥワ人女性に裁縫技術が教えられ、3年後にはムヤング村とカシヨデュ村にもプロジェクトは広げられました。訓練を受けた8人は今ではリーダーや助手として他の16人の女性たちに裁縫を教えています。これらの村は観光のために公園スタッフがゴリラを人付けしている地域のそばにある村々です。ポポフは裁縫の共同作業を通じて女性たちに自然資源の重要性を教え、ゴリラたちの魅力を伝えることに成功しました。ゴリラの群れのまわりで起こった不法な狩猟採集活動は1999年には468件も記録されていますが、2003年以來ほとんど起こっていません。ポポフの努力が実った結果だとうれしく思っています。

今ではこうした裁縫技術を使って、長袖シャツ、半袖シャツ、半ズボン、長ズボンを製作し販売しています。自分や子どもたち、そして夫たちの服を縫うとともに、現金収入を得る道も切り開くことができるようになりました。これらの服は現地だけではなく、海外のNGOでも販売されています。女性たちが手にする収入は毎年上がり、暮らしも楽になってきました。

「狩猟採集民プロジェクト」によって創設された3つの訓練センターの活動は、公園内の不法な狩猟採集活動の停止に大きく貢献しています。今後はもっと活動拠点を増やし、女性たちの裁縫技術の向上に努めていきたいと考えています。公園のまわりには6つの主要な狩猟採集民の村があります。これらの村々の女性たちがすべてポポフの活動を理解してくれたとき、ゴリラをはじめとする森林動物の環境も格段によくなると信じています。

催しのご案内



- 6月26日～7月1日
 - ポポフとコンゴ民芸展 堺町画廊（京都市）
- 7月1日 15時頃から（コンゴの料理と音楽も楽しめます）
 - ポポフ講演会「コンゴのゴリラと自然保護教育」
 - バサボセ・カニユニ
 - 参加費 2500円 堺町画廊（京都市）
- 11月16日～18日
 - 第11回サガシンポジウム 上野動物公園（東京）



環境省のプロジェクトがはじまりました！

山極寿一

平成18年度から3年間の予定で、環境省の地球環境研究総合推進費による「大型類人猿の絶滅回避のための自然・社会環境に関する研究」がはじまりました。これは、オランウータン、ゴリラ、チンパンジー、ボノボという大型類人猿の保護をこれまで日本人が主となって長期研究を継続してきた場所で推進しようとする活動のひとつです。代表者は日本モンキーセンター所長の西田利貞さんで、カフジ・ビエガ国立公園もその対象地に含まれています。

このプロジェクトには5つのサブテーマが設定されています。1) 大型類人猿の分布と密度に関する研究、2) 地域住民による森林利用の実態と環境変動についての研究、3) 大型類人猿の疾病と人間関係が大型類人猿の健康状態に与える影響についての研究、4) 植林による森林再生と分断化された生息地の連結についての研究、5) エコツーリズムとコミュニティ・コンサベーションによる環境保全の研究。私は主として5)のサブテーマを担当することになりましたが、カフジについては他のテーマの研究計画も立て、基礎資料を収集しなければなりません。

昨年6月にコンゴ民主共和国の隣国ウガンダで国際霊長類学会の大会があったので、私はそれに出席した機会を利用してポポフのメンバーで調査計画を立てることにしました。ポポフの会長のジョン・カヘクワさん、事務局長のドミニク・ビカバさん、中央科学研究所の研究者で現在IGCP(国際ゴリラ保護計画)のコーディネーターをしているバサボセ・カニユンさんが集まり、4日間にわたって計画を練り上げました。1)についてはこれまでも定期的にゴリラとチンパンジーの分布と生息数に関する調査を実施してきましたので、資料は整ってい

ます。2)は他の地域で実施されている調査項目と合わせる必要があります。そこで、コンゴ民主共和国のワンバ、ウガンダ国のカリンズですでに進行中の調査内容を担当者の古市剛史さん(明治大学)から教えてもらい、カフジに適した調査項目を加えてデータ・シートを作成しました。カフジ・ビエガ国立公園の周辺に居住する人々はほとんどが農民です。そこで、各家族について、所有する畑の大きさや作物の種類、収量などを正確に調べ、家畜やその他の所有物をどのように流通させて生計を維持しているか、そのうち自然資源に依存する度合いはどれぐらいかを調査することにしました。

国立公園の近くにあつて、公園の自然資源に影響の大きいミティ村とルウィロ村で、それぞれ平均的な生活をしていると考えられる家族を5つずつ選びました。各家族に読み書きのできる人がいるというのが条件です。その人に毎日、家族1人ずつの活動と物資の流れを記録してもらいます。朝起きて何をどれだけ食べ、どこへ行って何を買い、もらい、与え、交換し、それをどう使ったか、といったことを記録するのです。二つの村それぞれにその記録を収集してまとめる調査助手を1人ずつ雇用し、1ヶ月ごとに集計します。こうして、資料は着々と集められるようになりました。

サブテーマ3)に関しては現在、中央科学研究所の獣医たちが資料を収集しています。国立公園内には、密猟、密伐、密掘などの不法な活動が未だに多く、人為的な影響による類人猿の健康状態の悪化が懸念されています。これをどのように調べ、改善するか。今年中に日本モンキーセンターの担当獣医と連絡を取り、調査方法や資料の分析について詰めようと思っています。

サブテーマ4)は類人猿の生息地が小さく分断されている場所が対象なので、今のところカフジで実施する計画はありません。5)はこれまでポポフが推進してきた活動そのものです。ただ、内戦による治安状態の悪化でエコツーリズムは制限された形でしか実施できませんでした。1980年代は毎年2000人以上の観光客がゴリラを見にやってくるのに、内戦後は毎年100人に満たない状況です。平和になった今、再び多くの観光客がやってくるのが期待されています。

ポポフが設立された1992年、ポポフはすでに新しいエコツーリズムの計画をもっていました。それは、外国からゴリラを見に来た人たちにさまざまな自然と人々の暮らしを見てもらおうという計画です。ゴリラたちの健康や平和な暮らしを侵害しないためには、あまり多数の観光客



▶ルウィロの話し合い

をゴリラ・ツアーに受け入れるわけにはいきません。でも、地元の人々が誇るカフジの自然と伝統的な暮らしを紹介することで、観光にも幅を持たせることができるし、地元の人々も自らの暮らしを外からの目で眺めるようになります。そういった交流があって初めて、内外の人々がゴリラやその生息地の環境をいっしょに守ろうという気持ちが生まれると考えたのです。

それから15年経ちました。他の国や場所では同じような試みがなされています。成功したところもあるし、失敗したものもあります。それを十分に学び、カフジの場所柄、人々の性格、伝統行事、観光への可能性などを細かく検討したうえで、慎重に実行に移さねばなりません。ジョンさんもドミニクさんもさっそく飛び回って資料を収集し、各村で可能性を打診し始めました。カフジの周辺にある20の地区すべてです。集会を開き、住民の意見を聞き込んでいます。これからどんなすばらしい計画ができるか、とても楽しみです。



高校生のカフジ訪問

ジョン・カヘークワ



カフジを訪問した高校生と教師たち

ゴリラたちの近況

山極寿一

2000年に実施された生息数調査では、カフジ・ビエガ国立公園の山地林部 600 平方キロメートルに 130 頭のゴリラしか生存していないという結果でした。でもうれしいことに、2005 年に出された推計値ではその数が 163 頭に増加しています。現在はもっと数が増えているでしょう。その主な原因は密猟がやんで死亡するゴリラが減り、赤ん坊が次々に生まれていることです。今、カフジのゴリラはベビーブームを迎えています。

たとえば、チマヌーカ集団は昨年 4 頭しか赤ん坊がいませんでしたが、今年は 12 頭に増えています。何と 8 頭もの赤ん坊が昨年生まれたのです。メスの数も 1 頭増えて 17 頭になりました。この集団では、3 年前に移籍してきたメスが連れていた赤ん坊や、移籍直後に生まれた赤ん坊がチマヌーカの攻撃を受けて死亡するという事件がありました。どうなることかと心配しまし

たが、その後は子どもが傷つくことはなく、子どもたちは健康に育っています。双子も両方とも元気に成長しています。お隣の国ルワンダの火山国立公園でもマウンテンゴリラの双子が育っていますが、どちらも死なずに 2 歳以上生き延びた例は野生ではこの 2 つしかありません。ぜひ記録を更新してほしいものです。

昨年少なくとも 5 頭のメスといっしょに暮らしていたムガルカは、ほとんどのメスを失って、今はたった 1 頭のメスとカップルで暮らしています。どうもムガルカのところはメスの出入りが激しいようで、なかなかメスが居ついてくれません。父親のムシャムカは一時 42 頭の大集団を率いるほどの勢力を誇り、老齢になるまで立派にリーダーを務めていました。ムガルカも早くムシャムカのようにたくさんのメスや子どもたちに慕われるオスになってほしいものです。

ビリンドウワ集団では、子どもたちが成長して乳離れをしました。4 頭のメスのうちカンバが集団を離れましたが、3 頭の子どもの母親イラギ、ゾヴ、クワレはビリンドウワが気に入っているようです。ムファンザーラ集団にも新しく 5 頭の赤ん坊が生まれました。まだムファンザーラがあまり人間になれていないので、すべてのメンバーを確認するのが難しいのですが、このまま大きな集団になってほしいと思っています。



京都大学がモニターしているガニヤムルメ集団からは、2頭のメスが消失しました。おそらく他の集団へ移籍したものと考えています。また、新しくモニターを始めた集団が2つあり、ひとつの集団の若いオス1頭と12頭のメスから成っています。この若いブラックバックはマンコトと名づけられました。マンコトというのは数年前に病没したカフジ・ビエガ国立公園の公園長の名前です。マンコトさんは1980年代に若い研究者として公園に赴任し、まもなく有能な公園長として次々に保護政策を実施しました。その勇姿をみんなが偲んで付けたのでしょう。早くシルバーバックになってマンコトさんの名に恥じないリーダーとして活躍してほしいものです。

これで公園と京都大学がモニターしているゴリラの数は111頭、山地林に生息しているゴリラの70%近くを把握していることになりました。ここに暮らすゴリラたち全体の動向を判断しやすくなりましたが、人間の影響がより大きくなったという反面もあります。今後とも彼らの様子を注意深く、そして暖かく見守っていきたいと思っています。

▼カフジ・ビエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合計
	13歳以上	8-12歳	8歳以上	6-8歳	3-6歳	0-3歳	
ムガルカ	1		1				2
チマヌーカ	1		17			12	30
ピリンドウワ	1		3		3		7
ムファンザーラ	1		8		3	5	17
ランガ	1		5		1		7
ムブングウェ	1		6				7
ガニヤムルメ	1		8			3	12
マンコト		1	12	1			14
無名	1	1	10			3	15
合計	8	2	70	1	7	23	111



近刊案内

- 山極寿一編著 岩波書店
『ヒトはどのようにしてつくられたか』
- 伏木亨・山極寿一編著 人間選書、農文協
『いま食べることを問う』
- 藤田和生著 京都大学学術出版会
『動物たちのゆたかな心』
- 伊谷純一郎著 岩波書店
『原野と森の思考』
- 多摩アフリカセンター編 春風社
『アフリカン・ポップスの誘惑』
- 内田亮子著 勁草書房
『人類はどのように進化したか：生物人類学の現在』
- 中川尚文著 京都大学学術出版会
『サバンナを駆けるサル：パタスモンキーの生態と社会』
- 日高敏隆・白幡洋三郎編 八坂書房
『人はなぜ花を愛でるのか』
- 藤原章生著 集英社
『絵葉書にされた少年』
- 日本 ICIPE 協会編 京都大学学術出版会
『アフリカ昆虫学への招待』



阿部知暁画

ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：00810-1-90217, 加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

☆ポポフ絵はがきセット (10枚組)	1000円
☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット (5枚組)	600円
☆東ローランドゴリラ・ペンダント	2200円
☆東ローランドゴリラ・キーホルダー	2200円
☆どこでもゴリラ・ブローチ (木彫り)	3000円
☆ケイタイ・ストラップ (ミニゴリラ)	3000円

絵本『ゴリラとあかいぼうし』の読み方と歌のCD販売について

ダビッド・ビシームワさんの絵による絵本『ゴリラとあかいぼうし』(福音館書店)は、ゴリラの言葉がゴリラ語に近づけた発音のカタカナで書いてあります。このため、読み聞かせをするときに、「どうやって発音したらいいの?」と困る方がたくさんいらっしゃるようになりました。そこで、なるべくゴリラに近い発音で読んだ声をCDに録音しました。さらに本の末尾に載せてある「ゴリラとあそぼう」という歌を声とバックミュージックだけのカラオケ調の2種類で録音してあります。このCDを作成費と郵送費、それにポポフへのカンパ代500円を含め1000円で販売します。ご希望の方はポポフ・グッズと同じ要領でご注文ください。折り返しCDを郵送させていただきます。



▲ポポフ絵はがきセット

▲東ローランドゴリラ・ペンダント・キーホルダー

▲ケイタイ・ストラップ(ミニゴリラ)

▲どこでもゴリラ・ブローチ(木彫り)

▲ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット

ポポフのホームページ

HYPERLINK

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ピエガ国立公園、東ローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーティスト、ダヴィッド・ビシームワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部

お願い：ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

ククとクワレの頭の火

語り手：Malashi

おはなし出て来い、出て来いはなし。

むかしむかし、ククとクワレは森の中で暮らしていました。森の動物たちはククとクワレを、とてもとても怖がっていました。それはね、ククもクワレも頭の上に赤く燃える火を持っていたからです。だれもが頭の上の火を恐れて近づけませんでした。そんな訳で、ククとクワレは森の王様のようにして暮らしていました。

「言いつけた仕事は

すぐにやり終えることだな。さもないとこの火で、お前たちもお前たちの家も焼いてしまうぞ」こう言われると、動物たちはただただ恐ろしくて、ククとクワレの命令に従っていました。

ある昼下がりのことでした。ヒョウの老人が火をおこそうとして、火種が消えてしまっていることに気づきました。老人は孫を呼んで、ククかクワレの頭の火をもらって来るよう言いました。けれど、ヒョウの孫は怖くて怖くて、なかなか行こうとしません。

母さんに「さあ、行ってくるんだよ」とせかさされて、しぶしぶ出かけて行きました。

ヒョウの孫がククを見つけたとき、ククは居眠りをしていました。クワレもまたうとうとしていました。孫は、眠っているところを起したりすれば、ククとクワレが怒ってひどい目に合うのではないかと怖くなりました。

ヒョウの孫は逃げて帰ると、母さんに言いました。「ククもクワレも居眠りをしていたんだ。起したら、きっとひどい目に合わされるよ」

「おやそうかい、それはどうしたものかねえ。うーん、そうだ！ 枯れ草を持って行くといいよ。そおっ



と近づいて、頭の火に枯れ草をつけると火がとれるだろう」母さんにそう言われても、ヒョウの孫は怖くて行くことが出来ません。

「しかたがない、じゃ私が行くかね」母さんは意を決して出かけて行きました。

ククとクワレが眠っているところまで来ると、母さんはそおっとそおっと、枯れ草をククの頭の火に近づけました。けれど、火はつきません。クワレの頭

の火にも枯れ草を持って行きましたが、いくら待っても火も煙も出ません。まったくの役立たずです。母さんは、えいっとばかりに頭の火にさわってみました。するとそれは、とても冷たかったです。母さんは嬉しくなって「おおおおおお！！！！」と叫んで、ククとクワレを起しました。ククとクワレは、びっくりして飛び起きました。

「あんたたちは大うそつきだね。頭にあるのは火なんかじゃない。まったくのでたらめだよ。さっそく皆に言いふらしてやるからね」

ククとクワレは慌てて荷物をまとめ、森から遠く離れたところへと逃げて行きました。うそがばれて、森の動物たちに笑われるのが怖かったのです。

その時からククはとても臆病に鳴くようになり、村で人と暮らすようになりました。けれどもクワレの方は、森と人里の間に留まり、ククとクワレが森で一緒に暮らすことは、もうありませんでした。はい、これでお話おしまい。

記／絵：伏原納知子